

国語 1次 正答率・講評

問題	正答率 (%)				講 評
	受験者		合格者		
	完全	部分	完全	部分	
問一	1.3	97.8	5.0	95.0	<p>問題文の出典は、岡田美智男『(弱いロボット)の思考 わたし・身体・コミュニケーション』によった。「お掃除ロボット」・「蟻の足跡」・「LINEでの会話」のエピソードを通して、ロボットの&lt;不完全さ&gt;・&lt;弱さ&gt;と、それによって生じた「余白」に人間が介入することの可能性を探る文章である。三つのエピソードが共通して持っている構造を「弱いロボット」と人間との関係に適用して考えることができたかどうかのポイントであった。ロボットの&lt;不完全さ&gt;・&lt;弱さ&gt;を否定するのではなく、そこに生じる可能性を肯定的に考える筆者の姿勢を理解しうえて、今後の世界やテクノロジーの進歩について思考を巡らせる端緒としてほしい。</p> <p>問一の漢字問題では、「所作」や「動員」など、漢字は簡単でも日常的に使用することが少ないと思われる語の正答率が低かった。</p> <p>問二の語意の問題では、概ね正答率は高かったものの、前後の文脈から意味を類推しなければならない「鳥瞰」の正答率が低かった。</p> <p>問三・問四の接続語・用言の活用問題では、基本問題であるにも関わらず、受験者と合格者の完全正答率に大きな差が見られた。会話の流れを意識したり、言葉の使い方に気を付けたりするなど、言語に対する日常的な注意力が求められたと考えられる。</p> <p>問五は、筆者の家電に対する意識がどこに向いているのかを問う問題であったが、正答率が芳しくなかった。各選択肢と本文の個々の記述とを照らし合わせるだけでは正答できなかったと思われる。</p> <p>問六は、主体としての人間と客体としてのロボットという、人間とロボットとの一般的な関係性に関する認識を問う問題であったが、正答率は非常に高かった。しかし、本文はこの一般的に真実だと思われる認識に対して疑問を投げかける文章なので、本文を理解しながら自らの常識を更新することができたかどうか、問題全体の正答率に影響しただろう。</p> <p>問七は、筆者の問題意識への理解度を問う問題であった。ロボットの&lt;不完全さ&gt;に注目するだけでなく、それが人間に対してプラスにはたらいているという、常識的には考えにくい状況が生じているからこそ「不思議」なのである。受験者と合格者の正答率に大きな差が見受けられるが、このロボットと人間との関係性を頭に残したまま本文を読むことができたかどうか、問題全体の正答率に影響していると思われる。</p> <p>問八は、言い換えの問題であった。選択肢の表現がもつニュアンスの違いを細かく比較する必要があった。</p> <p>問九は、空欄補充問題ではあるが、内容的には、「LINEでの会話」と「蟻の足跡」のエピソードが共通する構造をもっていることを確認する問題であった。問八で正解を選ぶことができていれば正答するのは比較的容易であったと思われる。</p> <p>問十・問十一は、「ある出来事の要因をなにかに求める」際の二つのパターンについて問う問題であった。出来事の要因を客観的な視点から行為者の内部に求めているのか、それとも主観的な視点から行為者の外部に求めているのか、整理しながら本文を読む力が必要であった。</p> <p>問十二(1)は、「LINEでの会話」と「蟻の足跡」のエピソードがもつ共通の構造について問う問題であり、(2)は、発生した出来事の要因をどのように理解するかを問う問題であった。特に(2)の問題は本文の主題への理解度を問う問題であったが、得点率は芳しくなかった。「お掃除ロボット」と「LINEでの会話」とが共通する構造を持っていることを踏まえ、傍線部の直前で説明されている、「部屋のなかをまんべんなくお掃除する」能力はロボットと人間の両方にわかつた持たれていたという箇所を参考にする必要があった。</p> <p>問十三も、発生した出来事の要因をどのように理解するかを問う問題であった。正答率は概ね高かったが、問十二(2)の得点率の低さを考え合わせると、三つのエピソードが共通する構造をもつことに気付いた受験者は多くなかったようである。</p> <p>問十四は(1)・(2)ともに、本文の主題であるロボットの&lt;不完全さ&gt;・&lt;弱さ&gt;の、今後の社会における可能性について考える問題であった。(1)は与えられた条件に沿って思考する、パズル的な性格を持つ問いであったが、問題文をよく読んでいなかったのか、勝手に条件を変更してしまっている解答が多く見受けられた。(2)では、ロボットを人間と敵対する存在として捉えてしまっていたり、共存の必要性を漠然と主張していたりする回答が多かった。</p> <p>問十五は全体的な内容の理解度ををはかる問いであった。長い文章を整理して頭に残したままの状態では読まない、解答するのに時間がかかってしまっただろう。</p>
問二	1.9	93.0	2.5	93.8	
問三	45.3	52.8	66.3	32.5	
問四	20.6	78.8	33.8	66.3	
問五	23.1		33.8		
問六	81.6		91.3		
問七	44.0		62.5		
問八	37.3		53.8		
問九	34.5		53.8		
問十	39.6		51.3		
問十一	4.4	24.4	6.3	37.5	
問十二	(1)	69.9		75.0	
	(2)	1.3	26.3	1.3	
問十三	50.9		57.5		
問十四	(1)	2.5	50.3	7.5	
	(2)	3.2	25.9	10.0	33.8
問十五	15.8	77.8	23.8	73.8	

国語 2次 正答率・講評

問題	正答率 (%)				講 評
	受験者		合格者		
	完全	部分	完全	部分	
問一	12.5	87.5	16.1	83.9	<p>問題文の出典は池上英子「自閉症という知性」。</p> <p>自閉症と考えられる「紗都さん」に「私」がインタビューをしている形式の文章である。「私」は他者から理解されづらい「紗都さん」の感覚をできるだけ言語化し、その個性的な在り方について肯定的に語っている。</p> <p>読解の中心となる内容は以下の三点。まず、世界と自分との関係を言語という観点から捉える点。次に、自らと他者との差異を理解し肯定するという点。最後に、ソーシャル・インクルージョンの観点から他者の感覚を見つめる視座の獲得である。問題を解いていくなかで、今後の社会や教室空間において必要とされている視点を身に着けていくことができる文章となっている。</p> <p>問一の漢字の問題では、「書簡」の正答率が低かった。漢字自体の難易度というよりは、受験生に危機感のない語句であったことが原因であろう。その他の出題としては「現象」の「象」を「像」にしているものや、「要因」の「因」を「困」にしているものが散見された。</p> <p>問二の接続語の問題と問三の語彙の問題については概ねよくできていた。どちらも基礎的な問題であるため、ここで時間を効率的に使うことができた者は後の設問にじっくりと取り組むことができたはずである。特に接続語は紛らわしい問いが少なかったため、各段落の前後の把握ができていれば解答は容易だったことだろう。</p> <p>問四については傍線部の理由となる「紗都さん」の心情把握の選択問題であるが、正答率が芳しくなかった。傍線部直前は状況説明であり、理由となる「紗都さん」の内面の理由説明になっていないため、安易に直前の文章と似た内容を選ぶと誤答となる。設問を適切に理解したうえで前段落の内容把握が求められる設問であった。選択肢が説明する意味内容を正確に把握できていなかったことも要因の一つと言えよう。</p> <p>問六は問五で問うた言語の役割について、他者との関わりの中で説明させる記述問題である。問五の内容理解が前提となっており、前問は正答率が高いにもかかわらず、「自らの感覚に合う言葉」という説明が抜けている解答が多くみられた。直前の内容にあたる「他者に伝達することが可能となった。」という内容については多くのものが記述できていたため、前段落の内容把握が不十分だったとわかる。</p> <p>問九は、状況の因果関係を把握するための設問であり、全問題の中で最も正答率が高かった。この問いと問四の結果の相違から、具体的な状況同士を因果関係づけることはできる一方で、その原因が内面と結び付いたもの場合は誤答が多い傾向にあると言える。問九で正答して問四で失点した者は、設問で聞かれていることが内面なのか出来事なのかを正確に整理して読解する練習を心掛けてほしい。</p> <p>問十は本文中に明示されていない「尚美さん」の発言の意図を類推する設問である。娘である「紗都さん」の色彩感覚について、本文中の記述をもとに母親の心情を類推することが求められた。選択肢の吟味や照合が必要な問いではあるものの、そもそも受験生諸君は母親の心情を類推すること自体があまりないのではなかろうか。親の内面を類推することは他者理解のための第一歩であることを知ってほしいと思う。</p> <p>問十一はインタビュアーである「私」に関わる問いである。「私」がどの出来事を想起しているのかは、傍線部直後の「大容量の情報」という部分を見つければ容易である。しかしながら、出来事を完結にまとめて記述しなくてはならないにもかかわらず、その因果関係を適切な形で叙述できていない解答が少なかった。また、設問の指示を守れていない解答も多く見られた。</p> <p>問十二は『』が持つ意味について把握する設問である。本文中にある語句が『』を伴って出てきた場合、その語自体の意味だけでなく、多くは異なる意味を付与されている。『強烈』とはどのような意味において強烈なのかということが問われている。また、その強烈さが「共感覚」によるものであることが理解されていることも正答を選ぶ一つのポイントとなる。</p> <p>問十三は一見単純な内容把握の穴埋め問題であるものの、筆者の立ち位置や各認知構造に対する評価を正確に理解しているかを問うている。説明文などにおける筆者の主張と同様に、インタビュー形式の文章であっても筆者の意見を正確に把握してほしい。</p> <p>問十六は「紗都さん」の共感覚について具体的に説明する記述問題である。内容説明よりも、解答欄の形式に合わせられていないものや、否定の表現を用いないという設問の指示を守れていないものが多かった。傍線直前の内容をそのまま写すだけでは、前述の条件を満たさないことを理解しておこう。</p> <p>問十八は「共感覚」を持ったと仮定して、指示を守ったうえで文章を創作する条件付きの自由記述問題である。三つの指示を正確に守れていないものが多かったのは残念であった。多くの受験生が、考えたこともない他者の視点に立たなくてはならない設問であったが、これを機に自らが了解し得なかった他者に対して考えを巡らせてほしい。</p>
問二	33.5	64.4	41.5	57.6	
問三	48.4	50.0	59.7	39.8	
問四	58.7		70.3		
問五	76.5		85.6		
問六	6.4	57.8	11.4	63.1	
問七	88.2		90.7		
問八	83.6		90.3		
問九	95.8		99.6		
問十	69.1		82.6		
問十一	8.4	57.1	11.0	64.0	
問十二	59.6		72.0		
問十三	28.0	64.2	41.5	55.9	
問十四	68.9		76.7		
問十五	72.9		75.4		
問十六	4.2	49.1	8.1	59.7	
問十七	25.8	57.3	36.0	52.1	
問十八	1.5	39.6	3.0	53.0	

国語 3次 正答率・講評

問題	正答率 (%)				講 評
	受験者		合格者		
	完全	部分	完全	部分	
問一	17.3	82.2	40.0	60.0	<p>本文の出典は、安田峰俊『境界の民 難民、遺民、抵抗者。 国と国の境界線に立つ人々』によった。文化的なルーツをベトナムに持ちながらも、日本で生まれ育ったハウさんへのインタビューを軸に、国民国家という制度的枠組みからこぼれ落ちる人々の存在と、マイノリティの人々に対する同情に根差した無理解を指摘する文章である。</p> <p>問一の漢字の問題では、「一囚」を「一員」としているものや、「囚」を「困」としているものが目立った。他に誤りが多かったのは「発給」「承認」「先程」である。</p> <p>問二・三はおおむねよくできていた。特に、ハウさんの略歴を整理する問三は、本文理解の前提となる内容だけに、落としたくない設問である。</p> <p>問四～六も、客観的な事実を確認するだけの設問であるが、場面的状況をイメージしながら解答する問四と比べて、本文に列挙された情報を整理する問五や、同じ内容を因果関係から捉えなおす問六は難しかったようで、共に受験者と合格者の正答率に大きな開きがあった。</p> <p>問七・八は、ハウさんの内面について、文化的な背景と結びつけて考える必要のある設問である。問五・六で確認した情報を踏まえれば、ハウさんの背負っているのが文化的ルーツについての悩みであることが分かったかと思うが、それを直接問うた問七の正答率は合格者でも五割に満たなかった。受験生にとっては、政治と文化の問題を切り離して考えることが難しかったらしい（同じことは問十三にも言える）。</p> <p>問九は、再び客観的事実を確認するだけの設問だが、内容が難民や無国籍問題についての部分だったためか、受験者全体では問四ほどの正答率とはならなかった。一方で、合格者の正答率は問四と同じであり、情報整理を丁寧かつ確実にこなすことが、合格のポイントの一つであることが分かる。</p> <p>問十は、「もう、この質問は勘弁してよ」という内心が「さっきの番組」内の「私」のものであることを理解できれば、本文冒頭の場面に戻ることができたかと思われる。部分解答は抜き出しミスが多かったので、受験者全体でも七割以上が正答にたどり着いている設問である。</p> <p>問十一・十二は、共にドキュメンタリー番組の制作者に関わる設問だが、ハウさんとディレクターの関係性に基いて考える問十一に対して、制作のあり方について考える問十二は、受験者・合格者いずれも正答率がほぼ半減している。これは問十六の解答にも影響していた。問十六はドキュメンタリー番組の構造的な問題について問うている（問十二と同じ問題）のだが、ディレクターの出自の問題（問十一と同じ問題）として捉えている解答が非常に多かった。</p> <p>問十三は、ハウさんの両親のたどってきた歴史を踏まえて、ハウさん自身の留学の意味を考える設問であり、問三～八で整理・考察してきた内容がこの設問に集約されることになる。両親にとってベトナムの存在が、政治的な面と文化的な面とで異なることを説明する必要があったのだが、この違いが理解されていない解答がほとんどであった。</p> <p>問十四・十五は、国民国家とその限界について、本文に示された内容を確認する設問である。比喩的な表現を説明しなおした問十五と、該当箇所の要約を選択肢とした問十四とを比べると、もちろん前者の方が正答率が高いのだが、受験者全体では20パーセントの開きがあるのに対して、合格者は7パーセントしか変わらない。本文理解が本質的なレベルに及んでいるか否かが、その差に表れていると見ることができるだろう。</p> <p>問十六は、前述したとおり、ドキュメンタリー番組の構造的な問題を、「父」と「カメラ」の関係性のアナロジーで説明する設問である。マイノリティを一方向的な眼差しで対象化するマジョリティという関係性が正しく捉えられている解答は少なかったが、同情すべき対象であるというラベリングが対話を阻害し、理解不能な状況を維持することにつながるという点は、説明できている解答も決して少なくはなかった。このことは、この文章の主題でもあり、現実の我々が日々接するメディアの表現によって陥りがちな罠でもあるので、ぜひ理解してほしい部分でもある。</p> <p>問十七は、マイノリティ理解のための方策を示してもらった設問である。解答者の考えを述べる問いではあるが、本文中にヒントが示されており、それを完全に無視して解答することは難しい。特に気になったのは、善意を良いものとして捉える解答が多くみられたことだ。問十二でも同じことを問うたが、行為者自身の善意が理解を阻害している現状が少なからず存在する。重要なのは、先入観に捉われずに相手の立場や思いを想像することである。</p>
問二	61.6	37.7	63.6	36.4	
問三	87.2	12.8	98.2	1.8	
問四	76.1		83.6		
問五	49.9	45.3	76.4	23.6	
問六	49.6		69.1		
問七	35.5		49.1		
問八	46.9	40.6	61.8	38.2	
問九	65.0	33.2	83.6	16.4	
問十	53.3	19.3	61.8	20.0	
問十一	59.0		81.8		
問十二	26.9		43.6		
問十三	3.0	48.2	5.5	72.7	
問十四	37.9		67.3		
問十五	57.8		74.5		
問十六	1.8	13.6	5.5	29.1	
問十七	0.3	49.7	1.8	69.1	